

今治市内を中心に多くの染色加工業者と取引

表2は、1970年代から1980年代にかけてヤスハラと取引していた、おもな染色加工業者およびタオルメーカーである。

表2 (株)ヤスハラのおもな取引先(1970年代～1980年代)

事業所名	所在地
旭染織(株)	今治市
(株)阿部近染色工場	今治市
泉タオル(協)	今治市
越智源(株)	今治市
今治織物工業(協)	東予市(西条市)
在間染工(株)	今治市
西国染色工業(株)	今治市
四国染工(株)	東予市
昭和染工	北条市(松山市)、東予市(西条市)
蒼社染工(株)	今治市
大和染工(株)	今治市
中央繊維(株)	今治市
同心染工(株)	今治市
東洋繊維(協)	今治市
東予織工(株)	今治市
永井タオル	今治市
西染工(株)	今治市
原田タオル(株)国分捺染工場	今治市
松本染織(株)	今治市
丸今綿布(合)	今治市
丸井染工(株)	今治市
丸沢染工	今治市
村上染工(株)	今治市
(株)友染	今治市

注(1) あいうえお順に掲載。

(2) 太字はヤスハラ的主要取引先。

(3) 東予織工(株)は、丸紅と田中産業の合弁会社。

(4) 原田タオル(株)国分捺染工場は、のちにユーシン染工(株)、ハートウェルカラーワークス(株)、(株)ハートウェルに統合。

出典：渡辺隆司氏によるヒアリングより作成。

同業者団体の愛媛県繊維染色工業組合に加盟していた企業数のピークが24社（非組合員を合わせると27社）だったことを考えると、当該期にヤスハラが取引していた晒し場の多さが、この表でうかがえる。

表中の太字になっている染色加工業者は、ヤスハラ的主要取引先である。そのうち、旭染織（株）、大和染工（株）、東洋繊維（協）（現在は東洋繊維株式会社）は、今治では比較的規模の大きな事業所である。染色加工業者はそれぞれに特徴があり、たとえば、（株）友染は後処理のみをおこなう事業所である。旭染織（株）や泉タオル（協）、永井タオルは、タオルの製織工程を担うタオルメーカーだが、事業所内に前処理・後処理ともに晒し染めの加工ができる設備を備えている。同心染工（株）や東洋繊維（協）、丸井染工（株）は、タオルメーカーの（株）藤高、田中産業（株）、一広（株）がそれぞれ所有あるいは出資する事業所である。

表2であるように、今治市に工場をもつ染色加工業者がほとんどであるが、今治織物工業（協）と昭和染工は市外に工場があった。この2社との取引については、1973年の第一次石油危機の際に芒硝が十分に確保できなくなり、今治市内の取引先への供給を優先的におこなったため取引を中止せざるを得なくなった。

芒硝の確保が難しくなった理由は政府の政策にあった。石油危機による石油価格の高騰を受け、政府は合成洗剤の増産を優先し、芒硝生産・流通の統制を開始した。芒硝製造に関連する同業者団体はすぐさまこれに従い、ヤスハラに芒硝を卸していたメーカーも同業者団体に加盟していたため、芒硝の生産・流通統制を受けて芒硝不足に陥った。それにより、ヤスハラへの供給ができなくなった。

表2に掲げた取引先の多くは、1990年代以降のタオル不況によっていまは廃業している。そのうち現在も稼働しているのは、越智源（株）、蒼社染工（株）、大和染工（株）、同心染工（株）、東洋繊維（協）、西染工（株）、旭染織（株）（2009年にKBツツキ（株）によって旭染織の染織部門が買収されツツキボウ今治（株）となる）、

原田タオル（株）国分捺染工場（現在はハートウエルカラーワークス（株））である。

「技術のヤスハラ」を支える調合師

今治の染色加工業界では、「技術のヤスハラ」としての評価が定着している。1980年代のバブル景気の頃、「大切な色の調合はヤスハラにお願いし、調合のデータが決まれば、他社に多く発注する」という傾向がみうけられた。ヤスハラは、他メーカーよりコストが高かったわけではない。他社に比べて、取引先とあまり積極的な接待をおこなわず、技術で勝負していたにすぎない。昭和時代のタオル業界では、取引先との良好な関係を築くために、頻繁に懇親会を開いたり接待をしたりするのは一般的であったが、ヤスハラはそうした慣習に乗らなかった。それが上述の傾向が生まれた理由である。しかし、バブル景気終焉後に懇親会や接待が減っていくなかで、「技術のヤスハラ」に仕事を依頼する晒し場が増えていった。

現在、渡辺隆司氏はヤスハラの技術部に所属し、第一線で仕事を任されているが、同時に後進の指導にもあたっている。若い調合師の育成は、渡辺氏にとって悲願でもあった。

4. ヤスハラのみま

三代目社長・安原史紀氏亡きあと

ヤスハラの三代目社長であった安原史紀氏が2024年11月22日に急逝し、その後四代目を継承したのは渡邊康夫氏である。渡邊氏は大学を卒業後にヤスハラに入社し、営業を担当した。安原氏の右腕としてキャリアを積み、血族・親族の後継者がいなかった安原氏からヤスハラの将来を託された人物である。

そして、渡辺は、安原氏から絶大な信頼を得ていた調合師であり、ヤスハラでのキャリアは半世紀以上におよぶ。初代の安原新一氏から義男氏、史紀氏、そして渡邊氏へと4人の社長のもとで仕事をしてきた。渡辺氏は、「会社のおかげで、4人の子供たちを学校にやらせて無事に育て上げることができたし、相当感謝しとるけんね」と、ヤスハラでの50年の歴史を振り返る。

渡辺氏にとっては史紀氏の時代がもっとも長く、お互い盟友としてヤスハラの歴史を刻んできた。渡辺氏からみた史紀氏は、「寡黙な人」であったが、時代の変化を捉えながら会社の存続と発展をつねに考えて行動する人だった。ヤスハラが多角事業に積極的だったのは、そうした背景がある。

表3 （株）ヤスハラの事業内容

分野	内容
繊維（タオル）関連	タオル加工用染料・油剤
	捺染用染料・顔料
	機能性繊維用薬剤
	タオルプリント用エマルジョン
	バインダーの製造
	ホットメルト接着剤・粘着付与樹脂
	リサイクル関連商品
製紙関連	ハルブ用漂白剤
	製紙用（抄紙・加工工程用）薬剤
	排水処理用ポリマー・消泡剤・離型剤
	各種染料・界面活性剤
環境関連	窓ガラスの断熱および飛散防止フィルムの製造・施工
	空気触媒
	建築物への液体ガラス施工（補強、防錆、表面汚染防止）
その他	選挙用ポスター掲示板（リサイクル用）
出典：（株）ヤスハラの会社パンフレットおよび同社HPより作成。	

表3は、現在のヤスハラの実業内容である（「タオルびと」2020年6月号、7頁より引用）。これを参照すると、繊維（タオル）関連と製紙関連と環境関連の3本柱でヤスハラの実業が支えられている。主軸は、繊維関連と製紙関連であり、おもにタオルの染色および捺染（プリント）加工に使われる染料や顔料、各種助剤などの販売・製造、そして製紙向けの染料や各種工業用薬品などの販売・製造である。



愛媛県繊維染色組合が2017年12月に東京・青山にある「スパイラルガーデン」で開催した「IMABARI Color Show」にて、「1000色のレシピ」（1000通りの色をつくり出すためにヤスハラも協力）というタイトルでエマニュエル・ムホー氏によって創作されたインスタレーション（写真出典：今治タオル工業組合「今治レポート」No.5、2018年1月18日）

ヤスハラは、昭和時代から平成時代にかけて何度か危機に直面してきたが、表3でみるように、そのたびにリスク分散のための多角

化を自社の経営資源をベースに推し進めてきた。それでも2000年頃取引先の倒産によって資金繰りが苦しくなり、このときばかりは窮地に立たされ、希望退職者を募った時期もあった。しかし、3つの核となる事業が相互に支え合ってなんとか危機を乗り越え、ヤスハラの間がある。

渡辺氏は、これからのヤスハラを考えて70歳というひとつの節目を迎えた2023年の誕生日に、みずからの去就について史紀氏に相談をもちかけた。渡辺氏からの突然の相談に「病気なのか？大丈夫なのか？」と、史紀氏は驚いた様子だった。史紀氏からすると、渡辺氏からの引退を見越した相談は予想外のことであり、この先もずっとヤスハラのために現役をつづけるものだとおもっていた。

渡辺氏は、史紀氏の意向を受けてしばらくは現役を続行しようと決めたが、その矢先に史紀氏が急逝した。渡辺氏は、史紀氏からバトンを渡された四代目社長の渡邊氏に、生前に史紀氏と調合師の後継者について交わしたやりとりを伝え、その結果、将来ヤスハラを背負って立つ調合師候補として新たに若手が採用された。

現在は5人体制でラボが運営されており、渡辺氏は若い調合師の卵に技術を伝授する毎日である。「調合師を何十年やっても、失敗はある。やけど、一人前になるには10年はかかるよね。反応染料はできても、スレン染料の修正ができないかん。」渡辺氏は、ヤスハラの間を背負う調合師を育てるために、みずからの経験や知識のすべてを惜しみなく伝える。これは、ヤスハラへの恩返しでもある。「会社に対して、ただ感謝しかないですね。本当にありがとうございました。」

（次号につづく）

